

「新技術紹介：大豆の部分浅耕播種」

大豆の播種は梅雨期にあたり、降雨による播種の遅れや、湿害による出芽不良が問題となります。そこで、天候に左右されない播種技術として、改造ロータリを用いた部分浅耕一工程播種法が開発されました。

【技術の内容】

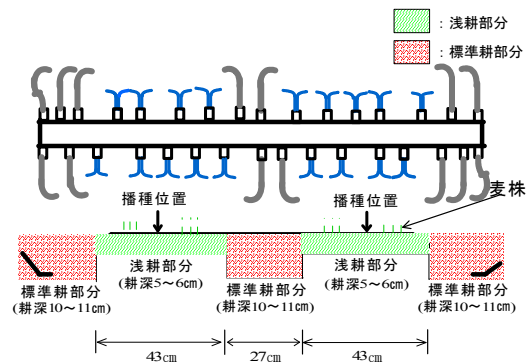
麦収穫後、麦うねをそのまま残し、改造ロータリで播種条を浅く、条間を標準の深さで耕起しながら播種する方法です。ロータリハローの播種条にあたる部分のホルダーに市販の培土用カルチ爪2枚を背中あわせで装着します。



部分浅耕一工程播種用改造ロータリ



ロータリ爪左カ右カ
カ右カ (管理用)
型番40670×18本
型番40680×18本



部分浅耕播種の模式

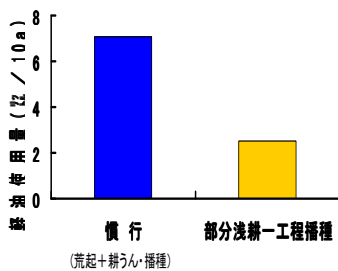
【技術の特長】

① 多湿条件下も播種可能

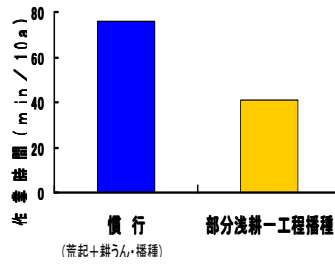
麦の畝が残っているため、溜まった水が速やかに排水されます。また、播種部分は浅く起こすので、多湿条件下でも作業が可能です。

② 省力・低コスト(作業時間は1/2以下、燃料は約1/3)

荒起こしを省略でき、ロータリの負荷が小さく、作業速度を上げることができるので、作業時間と燃料使用量が大幅に削減できます。



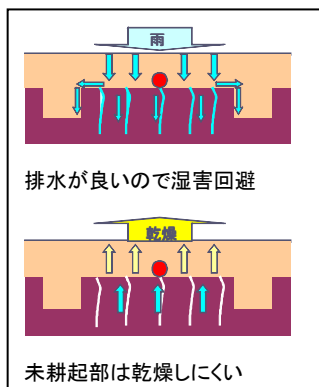
播種方法別の軽油使用量



播種方法別の作業時間

③ 乾燥にも湿害にも強く、出芽が安定

播種部分は浅く起こしているので排水が良く、湿害が回避されます。また、乾燥時には地下部から水分が供給されるので、乾燥時にも安定して出芽します。このため、湿害や乾燥のストレスを受けにくく、初期生育が良好となります。



標準耕(左)と部分浅耕(右)

「苗立ちが良く、初期の生育が良い」

④最下着莢高が高い

湿害や乾燥のストレスが少なく、初期生育が良いので、最下着莢高が高くなります。このため、収穫ロスや汚損粒が軽減されます。

【留意点】

- ①前作の麦うね跡を利用するので、麦のうね幅と同じ幅のロータリを使用する方が好ましい。
- ②うね幅が異なる場合や、大豆播種種前に雑草が多い場合は、茎葉処理除草剤を播種の十日前頃に散布。
- ③種子が鋤床に接するように播く（播種深度 5 cm程度）。